



第 33 号

(年 2 回発行)

発行所
喜多流大島能楽堂

〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633
FAX 084-923-8730
noh-oshima.com

生涯一度

能楽シテ方 喜多流職分

大島 政 允

能「道成寺」は現行の能の中でも大曲で、また位の高い作品として扱われています。静と動のコントラストが激しく、能楽師にとつては体力、気力、技術を試される大変難しい曲です。能楽師として一人前となるための卒業論文とも言われています。

私が能「道成寺」を披きましたのは今から四十年前、昭和四六(一九七二)年九月二四日、私方の舞台披きの日でした。上等の木曾檜で能舞台が出来上がりましたが、工事が遅れて当日の朝、ようやく畳が入るような慌ただしさでした。

舞台披能組は、午前十時より「翁」後藤得三師、能「白田村」喜多実師、能「三輪」神遊大島久見、能「狸々乱」喜多長世師。同日の午後四時より大島家先祖祭招待能として、私が能

「道成寺」を披かせて頂いたのです。後見をして下さいましたのは十五世宗家喜多実師、鐘後見を養父大島久見、笛・寺井政数師、小鼓・亀井俊一師、大鼓・亀井忠雄師、太鼓・観世元信師、ワキ・江崎金次郎師、能力を茂山千五郎師(四世千作)、茂山正義師(十三世千五郎)。能楽界の重鎮の方々に御出まし頂きました。皆様のお力添えで何とか事故なく舞台を終えましたが、私にとつて能「道成寺」は生涯一度の舞台となりました。

能舞台の天井についているつり鐘用の滑車は、この曲のほかには使われることはありません。輝久は東京の喜多の舞台で披かせて頂きましたので、私方の舞台のものは私が「道成寺」を披いた時、一度使ったきりになっています。

父久見が平成十六(二〇〇四)年二月三日に亡くなり、早や十二年。本年十二月二三日、十三回忌追善能を致すこととなりました。この日、長女の衣恵が能「道成寺」を披かせて頂くことになり、準備を進めているところです。頂いたチャンスを大切に日々精進し、つり鐘も滑

- P2 私見大島能楽堂 帆足正規
- P4 狂言の家に生まれて 茂山七五三
- P6 海の方こうでお能に導かれて 田中ブテイエ節子
- P8 本物の伝統文化体験 小林敦子

車も共々に無事勤め終えてほしいと念じています。



能「道成寺」シテ 大島政允 (1971.9.24) 大島能楽堂

私見大島能楽堂

帆 足 正 規

昨年秋のことだった。福山駅前のホテルからタクシーに乗り、

「大島能楽堂へお願いします」

と言うと、運転手さんから

「あそこの娘さん、頑張ってますなあ」

という言葉が返って来た。京都では、能楽堂の名を言ってもわからないことが多い。ましてや能楽師の活動について知っている運転手さんなど、考えられない。そこで又、前夜立ち寄った古書店でのことを思い出した。児島書店として、地方誌・史文献や郷土作家のものなどを揃えた、しっかりした店で、福山に来た時には必ず寄っている。

その時は、この店が復刻出版した「両備軽鉄便覧」を求めた。福山から府中まで、又鞆鉄の路線図があり、当時の広告を見ているだけでも

楽しい。帰りがけにもう一度棚を見渡すと、水上勉の「一休」が目についた。これは私の書架にもあるのだが買うことにして、

「明日は、大島能楽堂で江口の能の話をするのだけれど、この本を参考にしたので、江口を舞う大島先生に差上げようと思う」と言う

「大島先生ならばお代は結構ですから、あなたからプレゼントして下さい」

「それはいけません。払わせて下さい」「いや、大島先生にはいつもお世話になっていきますから」

「それでは児島書店さんからのプレゼントという事で差上げましょう」

こういうやりとりがあって、「一休」さんは大島能楽堂に納まることになった。

ほ あし まさ のり 帆 足 正 規 氏

能楽笛方 森田流

国総合認定重要無形文化財

1931(昭和6)年東京生れ。

高校の頃から宝生流 高橋進師に就く。

1950(昭和25)年 京都大学文学部入学、哲学科美学美術史専攻

大学2回生の時、森田流 貞光義次師に就く。

1960(昭和35)年 能楽協会入会、笛方となる。

1982(昭和57)年 日本能楽会会員となる。

舞台上で笛方を勤めるかたわら、新作狂言「死神」「維盛」「はらべ山」等を書く。

2000(平成12)年5月、新作能「鞍のむろの木」書きおろし、2002(平成14)年6月、国立能楽堂にて初演。

2014(平成26)年、法政大学能楽研究所より第25回催花賞を受賞。

宇治市在住。



この二つの会話から、大島能楽堂が、そして大島家が、福山の町の能楽関係者以外の人々からも、親しまれ、敬愛されていることが深く感じられる。

大都会での、能の存在感は、地方に於ける能の存在感よりもずっと薄い。新古東西の多様な芸術・文化の雑踏の中に埋没して、芸術的にはメジャーであっても、社会的にはマイナーな存在となっている。地方の能の存在感が濃いのは、他に多様な文化が無いからだ。こういう見方をする人もあるが、あまりにも皮相な考えである。大島家には、この地方に深く根を張って来た歴史がある。その努力は今も続いている。福山の町も、この地の誇るべき文化として、大島家の能を支えて来た。町は、そういう人のつながりによって構成される。大都会ではこのような意味での「町」は崩壊している。しかし、支えてくれ、親しみを持ってくれる町があるといっても、安閑としているわけにはいかない。町は生きている。絶えず活動の主体から発信を続け、血流を流し続けなければ、心臓は止まってしまふ。その仕事をずっと続け、成功して来たのが大島政允先生の夫人泰子さんである。その企画力、発信力、行動力は、私のような不精者から見れば驚異的である。そういえば、狂言は書くけれど、能を書くつもりは無い、と不精を決め

込んでいた私に「斬のむろの木」を書かせたのも彼女であった。今では有難く思っている。

能におけるプロデューサーの必要性が議論になって久しいが、実現している例は少ない。能のプロデューサーとして第一に挙げられるのは、鉄仙会の荻原達子さんであった。一九八八年、観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞されたが、受賞理由に

「質の高い能を上演することが能の普及・啓蒙につながる」との信念のもとに、清新的企画によるすぐれた成果をあげて、能楽におけるプロデューサーの必要性を広く認識させた」とあった。

大島泰子さんは、荻原達子さんに比肩する能のプロデューサーである。能楽社会としては、「地方」は大きなハンディである。それを、プラスに変え、能以外の多彩な芸術家のネットワークを作りあげ、地域を活性化しておられる。そして何よりも心強いのは、能楽師であると共に、プロデューサーとしての資質も受け継いでおられる衣恵さんの存在である。女性お二人、中々の論客だから、時には議論も起るにちがいない、とにらんでいる。その議論も、それが大島能楽堂を内から動かす活力となり、ひいて

は福山の文化を発展させる原動力になっているのではないか。

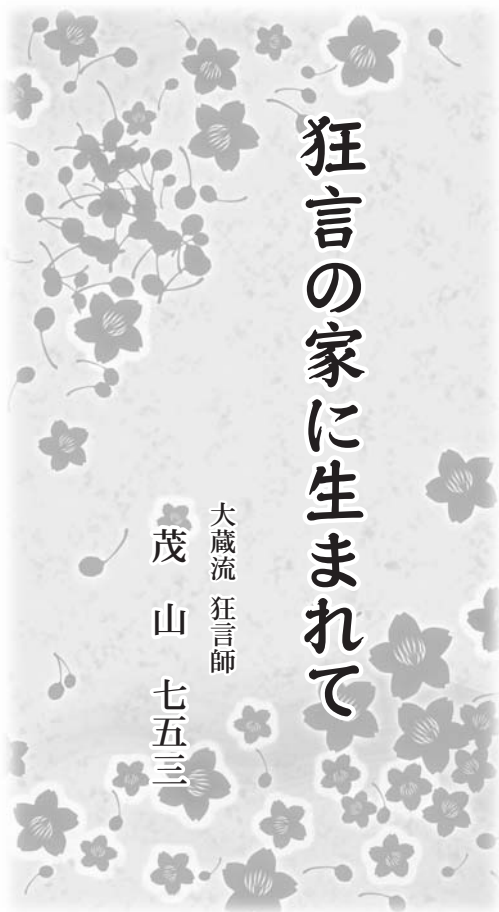
今回は、書いている内に自然に女性に焦点が当たってしまったが、大島政允先生、大島輝久さんについては、しかるべき人が、しかるべき評論を書くにちがいないと思うので、そちらにおまかせしたい。



舞囃子「烏頭」シテ 友枝昭世 大鼓 白坂信行 小鼓 成田達志 笛 帆定正規
(2015.11.15) 大島能楽堂



「三番叟」を舞う (2005.1.3) 大槻能楽堂
撮影 森口ミツル



しげ やま しめ
茂山 七五三氏

大蔵流狂言師。

1947年、人間国宝4世茂山千作の次男として生れる。

父及び祖父3世茂山千作に師事。

1970年、京都産業大学卒業後、京都中央信用金庫に就職。

狂言師と銀行員の2足のわらじで活躍。

1995年、銀行を退職し、2世七五三を襲名。

2000年より毎年のようにプラハとパリ俳優研究所 (ARTA) にて狂言指導。

チェコ共和国において〈七五三 (なごみ) の会〉発足。

2003年～2013年 京都能楽会理事長

多くの海外公演に参加する他、新作狂言にも多数出演。

1993年、京都府文化奨励賞受賞。

2007年、京都府文化功労賞受賞。

2009年、名張市市政功労者特別表彰者受賞。

2011年、京都市文化功労者受賞。

2015年、京都市芸術文化協会賞受賞。



本年一月、国立能楽堂にて親子三代、七五三・逸平・慶和で『鞠猿』を勤めました。京都で一度勤めていますが、東京では初めての舞台上で六才になる孫の慶和にとつても良い思い出になったと思います。狂言の家に生まれた子どもにとつて『鞠猿』は大事な演目です。狂言師の修行は「猿に始まり、狐で終わる」とも言われます。茂山千五郎家では、「祖父が孫を教える」ことが家訓で、私も亡き祖父(三世千作)によく教わりました。現在、私も孫を手取り足取り教え樂ませてもらっています。

福山のお舞台で思いついたのは、一九八六年九月、おシテの大島久見師が四人のお孫さんと一緒に勤められた『唐船』の間狂言をさせて頂いたお舞台です。当時はまだ信用金庫勤めと狂言との二足のわらじで、年の瀬ぎりぎりまで銀行の仕事をして、その足で観世会館での新年の謡初めに出勤ということもありました。

しかし、四十才で銀行を辞めて、狂言一本でいく決心をしました。二人の息子、宗彦と逸平に『釣狐』を教える体力が百パーセントある年齢を考えると、今しかないと思えました。狂言師として親としての決意であったと思います。その後一年間、一から学ぶ覚悟で父四世千作の鞠持ちで各地にお供しました。そんな折、一九〇年に先代の観世鏡之丞師が秘曲『嫉捨』をお勤めの折、その間狂言の依頼を受け上京し山

本東次郎師のお舞台を拝見して勉強させて頂いたこともあります。

一九九八年、プラハでの茂山千五郎家狂言公演がきっかけとなり、二〇〇〇年にプラハ、ブルノそしてパリの俳優術研究所(A.R.T.A)で狂言ワークショップを行いました。言葉も違う外国の人に日本の古い言葉の狂言をどのように指導すれば良いのか、戸惑いましたが、(名張子ども狂言)での指導経験が大いに役立ちました。子ども達も狂言の言葉はほとんどわかりませんが、密に接してやると吸収が早いのです。海外の受講生も言葉の壁を意欲でカバーし、上達が目覚ましかったのです。

二〇〇〇年、チェコ共和国に七五三(なごみ)の会が発足しました。その後、現地からの要請でほぼ毎年のようにプラハ、パリに出かけて狂言指導をしています。日本に留学をしたヒーブル・オンジエイ氏を中心としてチェコでは、チェコ人によるチェコ語狂言『柿山伏』『口真似』『附子』『清水』『棒縛』『柑子』等が完成し、現地でおよそ四〇〇回の公演回数を数えるまでに成長しました。そのことが、三年程前にイギリスへ留学されていた山中玲子氏のお耳に入り、ご褒美としてこの度、なごみ狂言チェコは野上記念法政大学能楽研究所より「催花賞」を頂戴しました。

日本の伝統文化狂言が海外の人々にも認めら

れ、海外の若者に継承され、お役にたてるのは本当に嬉しいことです。

長男宗彦も次男逸平もそれぞれの特技を生かしながら狂言の舞台を頑張ってくれていますし、孫たちの成長を楽しみにこれからも家族仲良くこの道に精進したいと思います。

「お豆腐狂言をよろしゅう！」



プラハでの狂言指導

海の向こうでお能に導かれて



Noh Society 代表

田中ブテイエ節子

二〇一五年一〇月ニューヨークにて「The Heart of Noh」と題し、大島衣恵さんによる二日間のレクチャ―を開催させていただきました。マンハッタンのなかでも活気あふれるユニオンスクエア広場に近いイベントホールを会場としました。そこには能舞台はないので、会場の一角を能舞台に似せて設置し、お能の醍醐味をできるだけ味わっていただけるよう舞台を取り囲むように客席を配置しました。

オープニングは、紋付袴姿の衣恵さんによる「羽衣」の仕舞。美しい舞は一気に観客を引きつけ、会場全体がお能の世界に包まれました。舞の後は、お能の歴史や舞台について、スライドを見ながら解説していただきました。続いては、日本からお持ちいただいた貴重な能面数点の披露、それぞれの面がどんな演目に使われるのか、また特徴や付け方の解説、さらには実際に面を動かして表情の変化などについてもお話いただきました。最後は衣恵さんご自身が実際に型や動きを見せながら、それに続いて一つ一つ説明してくださいました。

実践的で目と耳に訴えかける解説は初めて見る方にも分かりやすく、会場のあちこちで納得と感心のため

息が漏れるほどでした。衣恵さんの解説を、お能を知らない英語圏の方々にさらに分かりやすく通訳と解説をしてくださったのは、お能に精通されているシアター能楽のジョン・オグルビーさんでした。お話の後は、色彩や文様の解説と共に装束付けのデモンストレーション。普段見れない装束付けを身近で見られるとあって、着物を初めて見る方はもちろん、お能に詳しい方にも興味深くご覧いただきました。

プログラムの最後は、再び衣恵さんの舞です。その準備の合間に、ローマ字のフリガナを入れた謡本のコピーを配り、通訳と謡を担当したジョンさんのリードで、会場の皆様には「高砂」の待謡に挑戦していただきました。最初は躊躇も見られましたが、何度も繰り返すうちに最後は驚くほど大きな声で謡われ、初体験を楽しまれたご様子でした。いよいよ装束を付けた衣恵さんの登場です。「高砂」を舞う衣恵さんは、颯爽として普段の何倍にも大きく感じられました。頭の先から足の指先まで神経の集中した凛とした美しい動きが観客を魅了しました。

二日間の催しは両日とも満席で、観客の皆様からは好評を頂きました。日本人からは、「難しく思っていたお能がよく分かり身近に感じられるようになりました。」「こんなに近くで拝見し、その美しさに感動しました。」「他の国の方々からは、「真摯なプレゼンテーションから多くのことを学び、とても興味深かった。」「大島さんは能という男性社会の中でのパイオニアですね。お能をより身近に感じ、今回の経験から次回をもっと楽しめると思います。」「などの感想

を頂き、この企画の目的が達成されたようでも本望でした。

私は、大学卒業後歯科医師として開業医に勤務していましたが、一九九三年フランス人との結婚を機にフランスに渡り二年半の新婚生活後、スイスのチューリッヒに二年半、そして現在住んでいるニューヨークに来てから既に一七年が過ぎました。幸い二〇〇〇年に長男、そして二〇〇二年には次男を授かり、子育てに忙しい毎日を通り過ぎておりました。そんな日々のなか、子供達を通う五〇カ国以上の国籍を持つ生徒から成る国際色豊かな学校では、それぞれの国を紹介する機会もしばしばあり、そのたびごとに、日本の伝統文化がどれほど素晴らしい貴重であるかを深く感じてきました。それと同時に、他国の方々の日本の伝統文化への関心の高さにも驚かされました。

子供の成長とともに少し時間の余裕ができたからか、長年の海外生活による日本への郷愁からか、日本の伝統衣装である着物に興味を持ち始め、独りでは着られなかったレベルから、気がつくくと和装師として着付けを教えられるまでなっていました。それがきっかけで、伝統工芸の世界にも魅せられ、京友禅や東京友禅に携わる人々、伊勢型紙の彫り師、昔ながらの方法で生繭から糸を引き、平安時代の染色法を守っている染織家、また以前から興味を持っていた有田や常滑の陶芸家を訪ねるようになりました。そんな経験をするうちに、長きにわたり受け継がれてきた日本の伝統工芸の繊細さや美しさに心を動かされました。同時にそれらが存続の危

機に直面している現状を知り、微力でも何かできることはないかと考え、二〇一二年にマグノリアNYを主宰し日本の伝統文化を、このニューヨークで紹介する活動を始めました。昨年、その活動のひとつとして企画した「The Heart of NoH」は、大きな反響をいただき、図らずもマグノリアNYの方向性を大きく左右するところになりました。

この企画で、日本人にも他の国の人々にも大きな興味を抱かせるお能の素晴らしいさを再認識し、その中に表現される幽玄美、様式美、精神性、音曲また能面や装束の美しさこそが、日本の伝統文化の凝縮された姿ではないかと気づきました。そして、それらを通して日本の芸術や文化をご紹介できたらと考え、マグノリアNYを能ソサエティ(NoH Society)と改称し、能楽を中心に日本の伝統文化の紹介をミッションとした非営利団体として活動するという大きな一歩を踏み出しました。

大島衣恵さんとの出会いは、二〇一二年のフェイスブックでの不思議なご縁でしたが、企画を進めていく間の度重なるやりとりから、衣恵さんが明晰で信頼のおける方であることを確信しました。そして昨年の夏休みに帰国した際、福山の能楽堂を訪れ、衣恵さんとお母様に初めてお会いしました。衣恵さんは朗らかで思っていた通りのお人柄でした。また、お母様との会話から大島家のご家族の温かさを垣間見ることができ大変嬉しく思いました。

ちょうどその時、三和の森光信寺での薪能が開催され、幸いにも衣恵さんの仕舞を拝見でき

るという機会に恵まれました。初めて見る衣恵さんの舞は、その美しさはもちろんのこと、厳かで神秘的な尊さがあり、何とも言えない感動を覚えたのです。

ニューヨークの多くの人々に能の美しさと素晴らしさをお伝え下さった大島衣恵さんに感謝しつつ、これを機に今後ニューヨークの皆様能楽の魅力をお伝えし、日本文化への理解を深めていただけるよう活動していきたいと思っています。最後になりましたが、この紙面をお借りして「The Heart of NoH」の開催にご尽力いただきました大島衣恵さんとはもとより、シアター能楽のジョン・オグルビーさん、ジョイス・リムさん、そして、衣恵さんの大学時代のご学友でニューヨーク在住の山口万葉さんにご学友でニューヨーク在住の山口万葉さんにご学友でニューヨーク在住の山口万葉さんにご心より感謝申し上げます。



右から3番目筆者

本物の伝統文化体験

福山市立南小学校 校長

小林 敦子



平成二十七年四月、私は南小学校に赴任することになりました。着任のご挨拶に大島先生宅に伺い、謡でお世話になっていた母方の祖母のことを伝えると、泰子先生が大変驚かれ、この「能おおしま草紙」の創刊号を見せてくださいました。そこには、祖母の「謡曲とともに」父親を偲びて」の寄稿と、この年、初めて能体験学習をさせていただいた南小学校の記事が同じページに掲載されていることを知り、改めてご縁の深さを感じたことです。

祖母は、早くから先代の大島久見先生に師事し、謡を心から愛し、八十歳を超えても、「今日は大島だから。」と毎月、神辺からバスに乗り、指導を受けることをとても楽しみにしていました。私も幼いころ祖母の膝に乗り謡を聞いたり、能楽堂に連れて行ってもらったりして、謡や能に早くから親しませてもらっていました。この度こうした機会を頂いたのも、祖母と大島能楽堂の深い御縁と感謝しております。

さて、南小学校は、平成十二年から喜多流大島一門の諸先生のご指導により能楽体験学習を続けさせていただいています。「日本の素晴らしい文化を伝える能楽堂が校区にある。ぜひ子ども達にもふれさせたい。」という思いを大島先生方が受け止めてくださり、ご多用のなか時間を割いて指導くださっていると聞いております。はじめは、衣恵先生や輝久先生の仕舞を見させていただいたことから始まったようで、身近で仕舞をみるのが初めての児童は、謡の声の出し方、歩き方等に驚き、感激したとの記録がありました。その後も、総合的な学習の時間に

「日本の伝統文化のすばらしさを知り、地域への誇りを持つ」という目標を立て、ご指導を続けていただきました。

今年度も一学期から大島文恵先生、加藤千絵先生に六年生が指導いただきました。まず、腰を伸ばした正座や立ち居振る舞いに、いつもの生活との違いの大きさから戸惑う子どもが多かったようです。しかし、能の持つ伝統の力に引き込まれ、多くの子どもたちが

真剣に向かいました。また、能楽堂の見学の際には、大島先生から能や喜多流の歴史、能舞台の意味や神聖な場であることなどを教えていただきました。今年は「羽衣」を演じることとなり、謡曲の練習から始めました。言い慣れない謡も何度かの練習ですぐ覚えてしまう力も見せてくれた子どもたちです。十一月には、南区で行われたふれあい広場文化祭で、地域や保護者の方に羽衣の謡を披露しました。「東遊びの数々に」の力ある声がそらい、体育館に響き渡る声は聞いている者を引きつけました。二月の発表会では、初めて袴を身につけさせていた



だき、きりりと引き締まった姿で仕舞と謡を発表しました。ピンと張りつめた緊張感が見ている者にも伝わってくる時間となりました。

〈能体験を終えた児童の感想〉

○仕舞でなめらかに動くことはこれまでなかったのでもとても苦勞しました。でもその日本の伝統文化ならではの礼儀を身につけていきたいです。

○私たちにお稽古をしてくださりありがとうございました。私が仕舞をして難しかったのは「台わせる」ということです。友達と呼吸を合わせて動きを確認することは難しいけれど大切だということがわかりました。

○恥ずかしがる気持ちから、堂々と歌う力がついたのは、先生方がいつも笑顔で指導くださったからです。大島先生が舞台のことについておっしゃった言葉を忘れずに、能に関心を持っていきたいです。

〈保護者からのおたより〉

○能楽堂での貴重な体験をありがとうございました。本番では真剣さが伝わってきました。伝統文化の学習体験を通して成長させていたいただいたことが多くあったと思います。家でもよく練習をしていました。本番が終わった後も普段の生活の中で舞の足捌きが出てくるほどです。

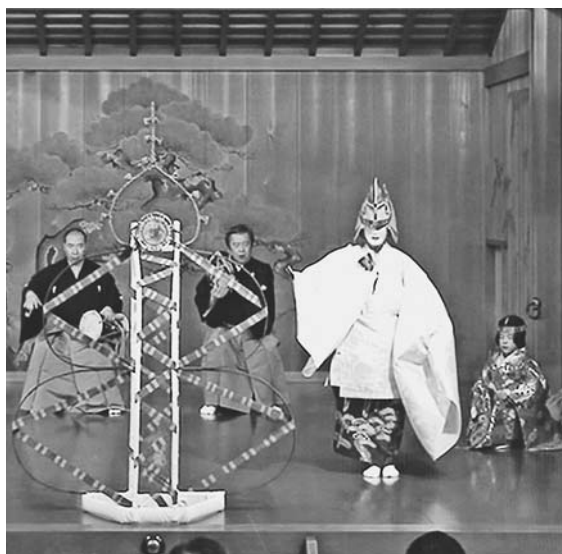
このように、他では経験することのできない

豊かな体験は、児童の心に入りこみ、たくさんの人を感動させる力を持っています。今後とも南小学校の教育活動において、この生きた力を日々の出会いの中で生かし、心豊かな児童の育成を一層進めていきたいと思っております。終わりにになりましたが、このように十五年もの長きにわたり、本物の芸術、格調高い能学習に触れる機会をいただいております大島一門の先生方にお礼を申し上げますとともに、今後ともご支援ご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。





能「江口」シテ 大島政允 ツレ 松井 彬 松井俊介 ワキ 福王茂十郎 大鼓 白坂信行 小鼓 成田達志 笛 杉信太郎
(2015.11.15) 大島能楽堂



能「富士太鼓」シテ 大島衣恵 子方 大島薫子
大鼓 谷口正壽 小鼓 飯田清一 笛 杉信太郎
(2015.6.21) 大島能楽堂



能「井筒」シテ 大島輝久 (2015.10.21)
燦の会 東京喜多能楽堂 撮影 前島写真館



能「橋弁慶」シテ 大島輝久 子方 大島伊織 (2015.12.20) 東京喜多能楽堂 撮影 前島写真館

2016年 演能ご案内

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月17日(日)	第245回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	舞囃子「忠度」 大島衣恵 狂言「文荷」 茂山あきら お話 落健一 能「草紙洗小町」 大島政允
5月15日(日)	社中追善 喜多流春の会	11:00	喜多流大島能楽堂	無料	舞囃子・仕舞・素謡等
6月4日(土)	燦の会	14:00	東京喜多能楽堂	S席 6,000円 A席 5,000円 B席 4,000円	能「高砂」 大島輝久 狂言「清水」 山本東次郎 能「桜川」 佐々木多門
6月19日(日)	第246回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「西行桜」 金子匡一 狂言「鬼の継子」 茂山千三郎 能「小鍛冶」白頭 大島衣恵
7月16日(土)	福山市市制100周年記念事業 新作能「福山」初演会	14:00	リーデンローズ 大ホール	指定席 6,000円 一般券 3,000円 学生券 1,000円	狂言「蝸牛」 野村萬斎 新作能「福山」 大島政允 輝久 衣恵
7月31日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光信寺 (神石高原町)	一般券 3,000円 学生券 1,000円	舞囃子「賀茂」 大島輝久 狂言「薩摩守」 井上松次郎 能「葵上」 大島衣恵
8月18日(木)	後楽園幻想能舞台	18:30	岡山後楽園能舞台	鑑賞券 6,000円	狂言2番 茂山千五郎家 能「花月」 大島衣恵
9月18日(日)	第247回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「浮舟」 大島衣恵 狂言「鳴子遣子」 山口耕道 能「熊坂」 松井彬
10月16日(日)	福山総合文化祭 秋の会	12:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月3日(祝)	岡山後楽能	1部 11:00 2部 14:00	岡山後楽園能舞台	一般券 4,000円 学生券 1,000円	1部 社中発表会 狂言「濯ぎ川」 茂山千三郎 能「土蜘蛛」 大島輝久
11月20日(日)	第248回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「巻絹」 大島政允 狂言「棒縛り」 茂山正邦 能「昭君」 大島輝久
11月23日(祝)	広島大島会 秋の会	12:00	妙慶院(中区)	無料	仕舞・素謡
12月18日(日)	喜多流自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 7,000円 要指定席券	能「車僧」 大島輝久
12月23日(祝)	大島久見13回忌追善能	12:30	喜多流大島能楽堂	正面指定 12,000円 ワキ・中正指定 10,000円 3階自由席 8,000円	能「経政」 大島伊織 狂言「鎌腹」 茂山千五郎 能「道成寺」 大島衣恵

編集デスクより

- 広報ふくやま(4月)の表紙に新作能「福山」初演会の告知をしていただきました。お陰様で、次々とチケットのお申し込みを頂き、誠に有難うございます。市役所、中央図書館、福山市立大学に特大ポスターも設置しました。本番成功へ向けて、ご協力宜しくお願い申し上げます。
- 能「道成寺」を披くにあたって、衣恵の道成寺祈願へご参加くださいました大島会の方々、本当に有難うございました。福山、広島、河内、東京から新大阪集合という企画、良かったですね。幹事の佐藤さん、お疲れ様！これで、後は本人が頑張るのみです!!
- 「僕は孫の追っかけです！」と嬉しそうにおっしゃっていた野口正吉氏が、1月17日に逝去されました。昨年、宮島の桃花祭の折、孫の伊織の応援に病をおして、駆けつけて下さったのが最後となりました。今度は天国で孫の成長を見守って下さることでしょう。
- 「能は難しい」という声をよく耳に致しますので、帆足正規先生に“能の楽しみ方”等を寄稿して頂きたいと思っていましたが・・・。(大島泰子)

